**Combe, W. & Rowlandson, T.**

*The English dance of death, from the designs of Thomas Rowlandson with metrical illustrations. The dance of life ; a poem.*

London, R. Ackermann's Repository of Arts, 1815-1817. 3vols. 23.4×15cm. 〈K382. 33-R〉 文献番号 2-20, 21

クームとローランドソン共著 『英国の死の舞踏—生と死の舞踏』

本書はイギリスの作家ウィリアム・クーム (William Combe, 1741—1823) 著『死の舞踏』および『生の舞踏』にローランドソンが，版画による挿絵を施し，アッカーマン社によって出版された3巻本であり，総じて『英国の死の舞踏あるいは生と死の舞踏』と通称される。ローランドソン (Thomas Rowlandson, 1756-1827) は，J. ギルレーと並んで18, 19世紀イギリスを代表する水彩画家および諷刺版画家である。ロンドンの富裕な布地商家に生まれた彼は，1772年，イギリス美術の殿堂であるロイヤル・アカデミーに入学し，デッサンと古典主義絵画を学んで，当時のアカデミー出身の多くの画家と同じく，肖像・歴史画家を志すが，1780年代よりユーモアに満ちた風俗画や諷刺画を制作して人気を博した。アカデミー画家からいわば民衆画家への転身は，豊かな資産の恩恵を受けてのフランスをはじめとするヨーロッパ大陸遊学，またパリやロンドンの社交界，歓楽街での贅沢三昧の遊楽に起因するとみられるが，その画風はけっして俗に流れず，フランス・ロココ美術の巨匠フラゴナールの典雅な画風に強く影響を受けて優美，繊細にして洒脱でさえある。1790年代より出版業者アッカーマンと提携して活発な出版活動にたずさわり，とくに本書の著者であるクームの代表作『シンタクス博士の旅行』の挿絵を担当してやはりアッカーマン社より出版し，さらなる名声を得た。『英国の死の舞踏』はこの3者による第2の人気本として広範に流布したローランドソン晩年の傑作である。

「死の舞踏」とは1424年から25年にかけて，パリのサン＝ジノサン（罪なき聖嬰児）墓地（現レ・アールの広場）の回廊に描かれた壁画で，原語としてはダンス・マカーブル (Dance Macabre) と称する。説教者と思われる人物による「永遠の生を望む理性ある者，死すべき生を善く終えるにあたり，この著名なる教えを心せよ，ダンス・マカーブルと言われしは，各々ダンスを学ぶこと，男女問わず自明なるは，死は大なる者も小なる者も容赦せぬことなり。この鏡の中に人々は見てとらん，かく踊ることこそ，適しけりと，そこに見定める者は賢き者，死者は生者を進ませり，汝，最も偉大なる者より始まるを知る，死をおいて他に委ねるものなきゆえに，ここで想うは哀れなる万事，すべて一物より造られ出でり」の序文に始まるこの「死の舞踏」は「最も偉大なる者」たる宗教界の長「教皇」と世俗界の長「皇帝」に続き，枢機卿，国王，総大司教，元帥，大司教，騎士，大修道院長，侍臣，司祭，代官，天文学者，市民，聖堂参事会員，商人，修道士，高利貸し，医者，楽奏士，農民，赤子などあらゆる身分階層に属する人々が老若男女を問わず死者（死骸像

としての死者あるいは骸骨）に導かれて墓場へと向かう舞踏行列図である。

サン＝ジノサン墓地回廊壁画は17世紀に破壊されてしまったものの，1485年，パリの出版業者ギュイヨ・マルシャンが木版画本として出版して汎ヨーロッパ的に流布し，墓地や修道院の回廊壁画のみならず，写本，絵画，そして何より版画本を介して大衆化していった。とくに16世紀ドイツ美術の巨匠ホルバインの木版画シリーズ「死の舞踏」では，生者と死者交互の舞踏行列図という当初の構成は大きく改変され，骸骨と化した死者が自在な身振りで日常のあらゆる場面に登場して生者を襲う趣向となっている。このいわば大衆化した「死の舞踏」は17，18世紀を通じてドイツ諸国で制作され続けたが，15，16世紀に次ぐ流行期はこのローランドソンによってもたらされることになる。高位の者，生の極みにある者をも死が襲い，死を前にしてはすべての人間は平等であるとの思想は，諷刺画家ローランドソンの滑脱な筆により，皮肉とユーモア，ペーソスを混じえた戯画のうちに貫かれ，当時のヨーロッパの覇者であった大英帝国の欺瞞と凋落も揶揄するものとなっているといえよう。

下図「上品な食事」は，イギリスの上流階級の人々の宴席に七面鳥の丸焼きを運ぶ死者の姿を描いている。当時のイギリスは，ローストビーフやプディング，七面鳥，といったイギリス特有の料理に舌鼓を打ちながら夜ごとの宴会，ギャンブルに明け暮れる人々がいる一方，安酒ジンの中毒となって貧苦のどん底にある労働者の下町が風紀上の問題となっていた。こうした社会階級間の不平等を摘発したW. ホガース（1697-1764）の辛辣な諷刺版画の伝統を受け継ぎローランドソンは，飽くことを知らない飲食の欲望を満たそうとする上流階級の退廃ぶりをコミカルに描き切っている。アル中と肥満による死亡率は当時も高く，「肥えた者は迅速に腐敗する」との中世からの名言どおり，死者は飽食の輩に焼肉を運んで死を早めようと目論んでいるのである。（小池）



上品な食事